

昭和55年度 貝類養殖漁場適正利用技術開発研究 (要 約)

青山 禎夫・田中 俊輔・平野 忠・仲村 俊毅・三戸 芳典
高橋 克成・永峰 文洋・三津谷 正・尾坂 康

本研究は、陸奥湾におけるホタテガイ養殖漁場の適正利用管理方式について技術的究明をおこない、ホタテガイ産業の安定的発展をはかることを目的として実施した。

I 実証試験

ホタテガイモデル養殖試験

- ① モデル養殖試験……津軽暖流流入部(陸奥湾湾口部)における養殖実証試験。 場所:平館
稚貝採取100個/パ→第1回分数20個/パ→第2回分散10個/丸の方法を主体に試験を実施している。昭和55年8月5日の稚貝採取でスタートした試験の経過は、56年10月4日の観察では平均殻長が97.2mm、生残率85%および生貝中の異常貝出現率1.2%などとなっており、この海域(津軽暖流の影響が大きくて成貝まで育成するのは無理との見方もある海域)でも適正な養殖管理によっては経済性のある養殖が可能であるとの判断が得られつつある。
- ② モデル増殖予備試験……地まき増殖のへい死克服をはかるための実証試験。 場所:野辺地
昭和53年産稚貝20万個を稚貝採取50個/パでそのまま12月まで中間育成し、害敵駆除をして150×150mの実験区に年内放流した。その後の継続観察によって放流種苗の育成方法と漁場管理が適正であれば地まき増殖の生産回復は可能であることが判明した。また、陸奥湾の地まき増殖の現状に対する問題点が明らかとなった。
- ③ モデル増殖試験……地まき増殖技術の体系化をはかるための実証試験。 場所:蓬田
昭和54年7月24~25日および27日に50個/パで稚貝採取し、そのまま育成した稚貝約50万個を同年12月17日に約5.6個/m²の密度で放流した(殻長35~39mm)。56年9月26日に潜水調査した経過は平均8.0cm、重量58g、へい死率1.3%、生貝中の異常貝出現率1.3%などとなっている。なお、56年度には脇野沢地区で500万個放流による大規模実証試験を開始する予定になっている。

II 養殖技術改良試験

- (1) ホタテガイの生理特性の検討:ホタテガイの生理生態に関する基礎知見を得るための実験をおこなった。
- (2) ホタテガイの種苗性の確立に関する研究:北海道・青森・岩手県産種苗がどのような育成管理のもとで生産されると流通種苗として有効性を持つかを評価し、更にその種苗の生産方法を確立するための共同試験を実施した(中間結果の概要を別項に掲載した)。

- (3) その他の試験および調査：ホタテガイ養殖実態調査では春期および秋期のいずれの調査でもへい死率、異常貝出現率が年々減少していることが明らかとなった。地まきホタテガイ実態調査では、地まき増殖のへい死回復が養殖に較べて立遅れていることがわかり問題解決のための施策が必要と考えられる。

Ⅲ 漁場環境条件調査

- (1) 海況自動観測：陸奥湾内に設置された5基のロボットブイにより海況観測を周年実施した。
- (2) 実証漁場環境調査：
- ① 実証漁場およびその周辺海域において水温・塩分・透明度・SS・有機炭素、およびクロロフィル a などの測定分析をおこなった。
 - ② 実証漁場底質調査：全硫化物・強熱減量・COD・フェオフィチンなどを測定した。



本研究の詳細については「昭和51～53年度貝類養殖漁場適正利用技術開発研究」、「昭和51～55年度貝類養殖漁場適正利用技術開発研究（要約編）」、および「昭和51～55年度貝類養殖漁場適正利用技術開発研究」（印刷準備中）の各報告書を参照されたい。